



MONDAY, SEPT 28, 2020 VOL. 12

人文学の現状と課題「輸入学問という性格」

文部科学省は、我が国における「人文学」の振興を図るため、係る学術研究推進部会を設置し、専門家の意見を取りまとめている。同省では、人文学の振興にあたり、学問には二つの効用があるとしている。第一は、生活上の便宜と利得の増大である。第二は、自分を作り上げていくこと、確立していくこと、いわゆるBildungとしての教養である。一方で、このような教養による人間形成あつての社会の形成であり、前者も後者も重要であるが、特に後者の効用を忘れてはならないとしている。ここで、後者の中心的な役割を担っている教養こそ、人文学に他ならない。

また、人文学の特性や役割及び機能を明らかにする前提として、日本の人文学が抱えていると思われる諸課題を大きく二つ指摘している。第一は、「輸入学問」という性格に伴う課題、第二は、「研究の細分化」に伴う課題である。本号では特集として、これら二つに、人文学の衰退、あるいは人文学への期待といった視点も加えた現状と課題を、合わせて、知識についてのメタ知識、諸学の基礎、教養教育、社会的貢献といった切り口から、人文学の機能についても、同省専門委の見解を紹介したい。概要は以下の通り。

まず、日本の哲学研究の課題としては、西洋の偉大な哲学者の著作に対する文献学的な関心のみが肥大化したいわゆる「哲学者研究」ととどまっており、本来の「哲学研究」になっていないことが挙げられる。ヨーロッパでは、かつて全ての学問を包括する有機的なシステムとしての「哲学」という概念があったが、19世紀にはそれが完全に崩壊した上で再編成され、「個別科学」の時代へと転換した。日本では「個別科学」の時代になってからヨーロッパの学問を取り込んだため、まさに専門分化した「科の学」としての「個別科学」を取り込んだということになる。これは歴史的な運命としか言いようがない。

日本の哲学研究は、百数十年間、西洋思想史の研究に必死に取り組んできた。西洋の偉大な哲学の歴史、そのテキストをまず言語を学ぶことからはじめ、テキストのクリティークをきちんとし、草稿、マニスクリプトまで丁寧に読んで、西洋思想史について正確に理解するという営みを続けてきた。ヘーゲル研究やマルクス研究などは世界水準に達している。しかし、問題は、それは哲学の勉強でいわば「哲学学」ではあっても、「哲学」ではないというところにある。日本の哲学研究は、ある哲学者の思想の文献学的研究に始まり、それを思想史の文脈の中でどう位置づけていくのか、そして、研究対象とした哲学者の著作の解釈を更新していくことにすべてのエネルギーを注ぎ込んでいる。哲学教育にしても、哲学の思想史研究としての哲学研究の専門家を養成することに著しく偏っており、社会の中の哲学的思考を育んでいこうという関心が非常に少ない。

哲学が「基礎学」としてあらゆる学問に関わるにせよ、「教養」として専門の学問を超えた一つの思考のより広い能力を発揮するにせよ、少なくとも、今の日本の哲学研究はそのような在り方とはかなり乖離した状況にあると考えられる。即ち、我が国の哲学研究、思想研究の特徴として、ある哲学者の哲学や思想を自分の専門とすることで通用してきたという状況を挙げることができる。これでは、きわめて専門化してしまった個別科学の一つでしかない。「基礎

学」とも言いえないし、「教養」とも言いえない。

哲学は、本来、社会的なディスコース、言説が生成するその場所に関わるものである。西洋近代の哲学者であれば、「自由」、「法」、「権利」といった概念が形成される社会の現場において発言し続けてきたと言ってよい。また、現代の西洋の哲学者も、社会的なオピニオンの形成の場であるジャーナリズムであるとか、社会の担い手を育成する初等中等教育に対しても、哲学者が深く関わっていると言ってよい。

「科学」をヨーロッパから輸入する際に当たり、近代以前から日本に存在する伝統的な学問の位置づけが不安定なものになってしまったと考えられる。明治以後、日本の学問というもの、学術というものの基本がほとんど西洋学というものになってしまった。選び取ったということにもなるが、その結果、そこでは日本伝来の、明治以前の我が国の学問である和学のほうの継承が本当に手薄なものになっていってしまった。今やおそらくいわゆる国文学・国史学というところだけで生き残っているという状態になっている。

人文学の現状と課題「研究の細分化」

研究の細分化が進みすぎると、「人間」や「歴史」に対する大きな認識枠組みの構築や提供といった一般社会からの期待に応えることができなくなる。「哲史文」が、一般社会に求める役割や機能、即ち、「人間」や「歴史」に対する大きな認識の枠組みの構築と提供という役割や機能を果たしていくためには、あまりにも研究の細分化、固定化が進んでしまっているという現状に留意する必要がある。あまりにも細分化しすぎるのも問題ではあるが、新しい歴史像といった認識の枠組みの創造の前提には個別的な実証研究の積み上げが必要であり、非常に重要なのである。

このようなメカニズムは、自然科学において実験や計測を積み重ねることなしに創造が生まれないというのと共通している。教授等の選考に携わってみると、人文学において、研究の細分化がかなりの勢いで進んでいるという印象を受ける。当該研究から若干離れた分野の研究者から見て、理解が困難な非常に細かい研究テーマを設定していないと、その分野の専門家として認められないのであろうか、という印象を受ける。このような状況を踏まえると、やはり全体を見渡す視野を持った人材、即ちオールラウンダーを育成していくことの必要性を改めて考えざるをえない。

また、人文学の衰退も課題の一つである。日本だけではなく、欧米においても、人文学は全体として予算やポストが停滞又は減少している。近年、人文学や社会科学の意味、重要性が、社会的に認知されなくなりつつあるという印象がある。伝統的な「哲史文」の枠組みが大学教育の場面から急速に失われている。大学における教養教育の衰退に伴って、「哲学」、「歴史」、「文学」といった、人文学の中核をなしてきた枠組みや名称が、教育の場面から急速に失われている。

一方で、人文学の知見がなければ応えられないような現代的な課題の解決への期待もある。現在、人文学の衰退が叫ばれる中、知的関心の高い人々を引きつけている斬新な研究もあり、これを人文学の覚醒への期待と見ることもできるのではないか。例えば、哲学や倫理学といった分野では、終末期医療や生殖医療における人間の尊厳といった課題を扱う生命倫理の問題や、現代人を引きつけている新宗教の問題など、哲学者や倫理学者、宗教学者の研究により様々な学説が提起されている。また、歴史学の分野では、現代の国際社会を理解する上で不可欠な要素であるイスラーム史に関する研究の興隆や、日本社会の包括的な理解という観点から中世社会史の研究に対する期待感といったものを挙げることができる。文学研究の分野では、今年、執筆後1000年を迎えた源氏物語を東アジア世界の文学表現全体の中で考察した研究や、「カラマーズフの兄弟」の新訳がブームになっていることなどを挙げることができる。

人文学の機能「知識についてのメタ知識」

人文学とは、「(精神的価値、歴史時間及び言語表現に関する)世界の知的領有」と「知識についてのメタ知識」で

ある。人文学、社会科学研究を社会に対する役割という観点から大きく分類すると、①「ヒューマニティー」を探究するタイプの研究、②社会との関わりの中で行われるタイプの研究、③国際社会との関わりの中で行われるタイプの研究があると思う。①は人文学、社会科学研究の中核を成す非常に重要な研究である。②は政策や応用といったプラクティカルな性格を期待されるようなタイプの研究であり、社会からの支援を受けやすいタイプの研究である。③は諸外国との学術交流を通じて、例えば国際社会の中で日本が他国と共存していくためのいわば手段としての性格を期待されるようなタイプの研究である。①と③については、社会の理解や支援といったものを得にくいということが、現在の人文学や社会科学研究の振興に関する課題となっていると考えられる。

一方で、人文学の仕事は、「価値の尺度」について判断することにある。即ち、一定の「価値の尺度」を前提にして、その尺度に基づいて優劣を判断していくのではなく、「価値の尺度」そのものが本当に正しいのかどうかの論議を行い、判断をしていくこと、これが人文学、とりわけ哲学の仕事であると考え。このような役割を人文学が果たすために、人文学の研究者は、社会や過去の古今東西の様々な考え方や色々な価値観の在り方を学び、自分の価値観、自分の帰属する社会の価値観を相対化している。また、異なる文化や過去の中に、自分たちと異なる価値観を発見し、学び、自分にフィードバックして自分の価値観、自分の帰属する社会の価値観を練り直していくのである。人文学、社会科学の研究は、既存の価値や通説に対する「懐疑」から出発する場合が多い。このような意味で、研究者が自由な発想に基づき研究を行っていくことが重要なのである。

「哲史文」という研究領域の背後に、より高次のあるいはより根底に関わる「人間研究」という研究領域がありうるが、現実には、「人間」を全体として考えるための様々な手段を構築しつつ、個別の研究を支えるための仕組みを考えていかざるを得ないという難しい課題がある。「文学研究」とは、「研究者個人の精緻な読解力」、「イメージネーション」そして「人間そのものへの洞察力」を通じて、重層的かつ派生的な複合体として存在するテキストから、新たな読みの可能性を引き出すことであり、当該テキストのうちに隠された文脈と世界のモデルを発見し、それを限りなく更新していく営みのことであって、これを一言で言えば、「人間の多様性の解明」である。研究者は、このような人間と人間間、及び人間社会の隠された多様性、多元性の発見を通じて、それぞれが与えられた存在のあり方と運命への認識を深めることになる。

人文学の機能「諸学の基礎」

人文学には、「精神的価値」、「歴史時間」、「言語表現」といった個別の研究対象に加え、自然科学的知識や社会科学的知識、技術的知識も含め、それらの知識が人間、社会及び文化に対して、どのような意味を持っているのかについての知識、いわゆる「メタ知識」を取り扱うという機能がある。このような観点から、人文学は、個別の研究領域や研究主題を超えて、社会科学、自然科学及び技術に至るまで、これらのものを学問的に統合し、もしくは連携させるための重要な位置を占めていると考えなければならない。

「知の体系化」、「知の構造化」については、「メタ知識」を取り扱ってきた人文学には、自然科学的知識、芸術的知識等々を統合することができる可能性があるということが出来る。その可能性は、かつてのアリストテレスの知の体系や、ディドロ、ダランベールの「百科全書」といった形で、その時代においては成功をおさめていることから分かる。ただし、現在の知の蓄積は、かつてと比較にならないほど膨大であるので、情報集積、情報処理のための技術的な手段の開発という課題がある。

人文学は、「精神的価値」、「歴史時間」、「言語表現」を研究対象としている。即ち、人間の社会・文化が成立するに当たって人間の「精神的価値」はどこにあるのか、また、「精神的価値」は単に現存するだけのものではなく、「歴史時間」の中で形成されてきたものであり、その歴史的な脈絡はどのようにして理解できるのか、さらに、「言語表現」を理解する在り方はどのように説明できるのか、といった問題を伝統的に取り扱ってきた。これらの問題は、古典的な

問題であると同時に、現在でも決して十分に説明できていない重要な問題である。

とりわけ哲学は、私たちが、普段これは当たり前のことだ、自明のことだと考えているものの考え方とか、価値というものを揺るがしていく、あるいは疑ってかかるというものであり、常にものの考え方のルールを、あるいは、土俵を絶えず更新していくような性格のものである。哲学は、あらゆる学問の基礎を考究する学問である。知識(ナレッジ)が単なるオピニオンではなくサイエンスでありうるための根拠を探索するのが哲学であり、いわば諸学が科学として成立する条件といった学問の根本に関わる学問であると言える。このような考え方に立てば、あらゆる科学者は同時に哲学者でなければならないということになる。つまり、自分の学問の根拠を考究していけば、必ず哲学の問題にぶつかるのである。例えば、物理学であれば「物質」、「運動」あるいは「1」という概念、医学であれば「病」、「異常」という概念について考究すること、また、歴史学であれば、「現存していないもの、即ち不在のものについて科学的に探究するとは何か」といった問題について考究することは、まさに哲学と言いうるものである。

一方で、哲学を「虚学」とする見方がある。この場合の「虚学」とは、社会が直面している現実の課題に取り組む「実学」に対する概念であり、机上の学問というほどの意味である。近年、環境の問題、老いの問題、教育の問題、家族の問題、性の問題、障害の問題といった問題が重要視されている。これらの諸問題に対しては、制度の改革や技術的な解決といった「実学」のレベルでの対応ではなく、我々の考え方そのもの、つまりフィロソフィーを根本から検討しなおすことが求められていると言ってよい。これはいわば、「実学」の反対概念としての「虚学」である哲学が今まさに求められていることを示すものではないか。

哲学には、諸学を基礎付ける「基礎学(Grundwissenschaft)」としての役割と、「教養(Bildung)」としての役割がある。「基礎学」としての側面を考えた場合に、「知識(Wissenschaft)」は純粋な「知識」として成立するのではなく、歴史的、社会的な制約を受けつつ、ある歴史的、社会的枠組みの中で歴史的、社会的な制約を受けて生まれてくるものであることに留意する必要がある。これは自然科学においても例外ではない。哲学が諸学を基礎付ける「基礎学」であるならば、哲学が文学部にあるのは非常におかしなことである。自然科学の哲学、歴史の哲学、医療の哲学、宗教の哲学、芸術の哲学等々、あらゆる学問の基礎に哲学が存在しているのであるから、あらゆる学問分野の研究と教育の基礎に哲学がなければならない。

また、文学に関して言えば、「文学研究とは『人間』を研究することである」という考え方がある。これは、文学研究が、根本のところでは諸学の上位に立っているという信念の表現とも言える。このほか、自然科学と人文学の関係では、日本で「科学哲学」と言う場合、「哲学」の一分野としての「自然科学に関する哲学」という意味で使用されているが、本来、「哲学」は学問論というような意味で「科学哲学」そのものであるはずである。

人文学の機能「教養教育」

「教養」とは、世の中の様々な価値に関して、何が大事なのか、本当に大事なものは何かについての正しい判断力を持っていること、価値の遠近法をわきまえていること、という形にも定義することができる。この場合、哲学は価値の尺度を判断するものという意味での「教養」とする考え方がある。また、教養教育には、大衆教育という面もあるが、才能を発掘する方法という側面もある。人生哲学的意義とともに、社会における自分の適性を知る上で有用な側面があるとも考えられる。教養教育とは、人生のきっかけづくりであり、多様な個性的存在が会おうということに最大の意味があると考ええる。

同時に、「教養」は、世代間のコミュニケーション及び共時的なコミュニケーションという2つの観点から、ある種の共通のコミュニケーションの道具、即ち「共通規範」と言ってもよい。グローバリゼーションの時代の中で、相手とネゴシエーションをして問題解決を図ることができるかは、「教養」に幅広く立脚しているかにかかっている。ヨーロッパや中国においては、世界や人間を考えるための教養や理念は「古典」を読むことを通じて修得できるという考え方が受け継がれてきた。このような歴史的背景を踏まえると、現代においても、高等教育とか、生涯学習といった場面で、「古

典」を読むことが推奨されることは容易に理解できる。古典を学ぶことを通じて、人間の在り方、社会のダイナミズムを知ることができる。このような意味で、古典を学ぶことには社会的有用性があると言える。我々日本人が、問題の大小とか軽重を判断する能力に弱点があるのではないと言われるのも、このような輸入学問の中で身に付いてしまった原典軽視の発想を引きずっていることに原因の一端があるのかもしれない。

また、哲学の「教養」としての側面を考えた場合、広い視野と深い配慮を背景にして、様々な価値の尺度について判断することになる。例えば、様々な価値に関して、「なくてはならないもの」、「あってもよいが、なくてもよいもの」、「端的になくともよいもの」、「あってはならないもの」を判断することが「教養」としての哲学ということになるのではないか。自然科学の本は、読んで100パーセント分らないと分かったことにならないと言ってよいが、哲学の本というのは、読んで20パーセント分かればぜいたくといった性質のものである。しかし、仮に10パーセントしか分からなかったとしても、その10パーセントの中に何かものすごい衝撃があり、そして、何度も何度も人生の中で繰り返し読む。哲学の本とはそういうものである。

人文学は、基本的に「教養教育」としての機能を有している。例えば、ヨーロッパにおけるリベラル・アーツが、ヨーロッパにおける学問研究、学問教育の基礎をなしてきたことは言うまでもない。また、中国では、四書五経の読解が世界や人間を考えるための教養や理念を提供したものと言うことができる。さらに、これらリベラル・アーツや四書五経は、物事を考える上での思考のパターンや、学術上の概念の使用法といった方法的な基礎を与えるものでもあり、これらが、法学や医学といった専門の学問を学ぶ上での前提にもなっていた。

これらは現在で言えば、人文学の基礎教育とか、基礎教養と言われているものにほぼ相当している。ただし、「教養」については、それぞれの地域に固有の「教養」が存在するものであり、さらに、それぞれの地域の固有の伝統に基づいたリベラル・アーツを前提とし、その教養の上に立った学問を作ることが重要である。世界中どこでも同じ学問ということでは必ずしもない。

人文学の機能「社会的貢献」

人文学の社会的実効性については、様々な議論があるが、やはり、公共物としての学問や、公共物としての大学あるいは高等教育という観点から、何らかの社会的実効性があることを証明しなければならない。そのためにも、21世紀のリーダーを育てるためには、哲学と数学を学修させることが重要と考える。哲学は構想力を、数学は解析力を育成するものであり、これらを通じて高度な価値判断に基づき速やかに意思決定できる人材を育てることができる。人文学は、文明社会の根底にある人間観を基礎付けている。現在、情報技術やバイオテクノロジーの進展に伴い文明社会の在り方が変容しているが、そのような中で人間がどうあるべきかを人文学が提示していくことが求められている。また、その際には、人文学と自然科学とのコラボレーションが課題となる。

現代社会においてあらゆる領域を覆っているグローバリゼーションの流れの中で、文化の多様性や個性との調和の観点から、人文学が果たす役割は大きい。グローバリゼーションが進行する中で、固有の文化がどのようにして成立するかということに人文学者は大きな責任を持っていると考えられる。固有の文化を創り上げるためには、多様なチャネルを通じた多様な知識の蓄積が必要である。グローバリゼーションの時代を迎え、古典的な人文学的教養が通用しなくなる時代が来るのかもしれないが、古いけれどもやはりそのような教養のあり方、教養のイメージというものが、今後も長く残っていくのではないかと考えている。

現在、画一性の論理を前提とし、個性を剥奪していくというグローバリゼーションの流れの中で、個性を前提とした「教養」というものが具体的にどうあるべきなのか、困難な問題に直面している。学問の効用には、①個人の確立や個人の解放、②生活上の利便性の増大とともに、③コミュニケーションや異文化との共存、社会システムの在り方への貢献があり、人文学や社会科学は、③のような問題への対応が求められるのではないかと考える。

人文学の知見が、政策形成や、制度・機構等の形成に当たって、サポート要因となることも重要である。例えば、文学やその他の言語表現が人々のコミュニティ形成にどのような役割を果たすことができるか、博物館・美術館等の施設や機構がどのようにして利用者に対してメッセージを発することができるのか、再生医療や終末期医療等のいわゆる生命倫理の問題について、価値や倫理の問題から人文学としてどのような考え方を提示できるのか、このような試みを通じて、人文学の知見が社会や政策に対して何らかの貢献ができるものと考えられる。

大学における研究活動を見ると、専門家共同体内での知識のための知識の競争といういわゆる学術研究活動と、技術的な知識については、いわゆる産学連携というような形で、研究成果の社会還元活動が行われている。実は、このような専門家同士の競争と産業社会への貢献のどちらからも取り残されているのは一般市民である。哲学をはじめとする人文学は、市民社会的な自由の確保という観点から、その学術的成果を活用することができると考えている。例えば、科学技術の社会への適用の場面において発生する市民と専門家とのコンフリクトの調整、コンセンサス形成といった問題に対して、諸学の基礎付けの学であると同時に、アマチュア的な教養でもあるという「哲学」の二義性を活かすことで、哲学者が市民と専門家との間のコンセンサス形成を上手く果たすことができる可能性がある。また、このような市民社会的な自由の確保に関する哲学的な訓練を通じて、公共的な事柄に関して自ら責任を負うような市民を育成することにも資すると考えている。

古今東西の様々な考え方、価値観について議論をすること、そのような議論の作法を中等教育段階から教育していくことも重要である。このため、哲学研究者はそのようなコミュニケーションの作法を身に付けたファシリテーターとして、哲学教育を行っていくことが求められている。人文学、特に哲学には、社会のニーズへの対応という点について、学術の専門性を市民社会的な自由へとつないでいくという貢献ができる。事例として、科学技術の在り方への市民のかかわりに関して、市民参加型のテクノロジーアセスメント、都市づくりにおけるシナリオワークショップ、コンセサンス会議などがある。意見が異なる人々が、一つの事柄について論理的に議論ができる、そういう場を設定してファシリテートしていく能力を育成するのも哲学の大きな仕事である。市民社会との関わりということで考えれば、個別科学の細かい知識からのアプローチというよりも、物事の考え方をどうするのか、どのように価値判断を行っていくのがよいのかという哲学によるアプローチが有効であると考えられる。

一方で、哲学が日本の社会において受け入れられにくいのは、第一に翻訳語特有の難しさに原因があると考えられる。例えば、「存在」、「無」、「生成」という哲学用語は、英語では「ビーイング」、「ナッシング」、「ビカミング」という日常用語である。これを正確にとらえるため、造語により翻訳したのではあるが、結果として、言葉の難しさが哲学への日常的な接近を妨げてしまったことは否めない。

第二に、哲学が取り扱うテーマ自体が浮世離れしているという社会の側の理解、ある意味で誤解があるからと考えられる。特に、日本においては、西洋哲学のテーマの中で、認識の問題とか、存在の問題といった一部のきわめて抽象的なテーマを非常に拡大視して取り扱ってきたところに社会との乖離の原因があるのではないかと。本来、西洋の哲学者の問題関心は、そのような抽象的なテーマにとどまらず、歴史、政治、法、教育といった具体的な問題にも十分向けられていたはずである。

【主要支援先】

独立行政法人日本学術振興会
公益財団法人日本学術協力財団
公益財団法人菊葉文化協会

東京藝術大学130周年記念プロジェクト
東京大学新図書館(AC)計画
京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

三思会

three-thought.com

